

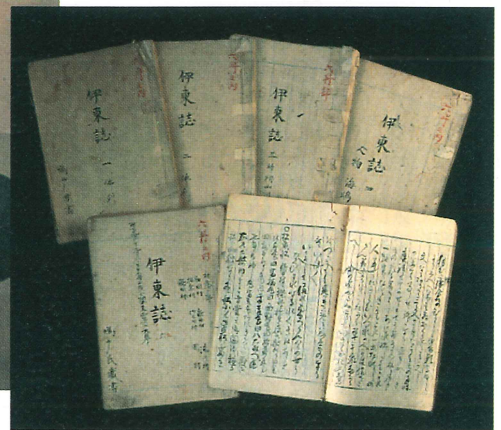
伊東市史だより

第4号

平成15年3月20日



濱野建雄像 濱野家蔵



『伊東誌』鳴戸家写本 鳴戸家蔵

濱野建雄と伊東誌

—写真解説に代えて—

江戸時代の伊東を知るのに、無くてはならないのが、濱野建雄が書いた『伊東誌』という本です。

この本には江戸時代の終わりに近い頃の伊東七か村(後の旧伊東町)のことが、いろいろな方面にわたってくわしく書かれています。

濱野建雄は、和田村(現在和田一丁目)幸手屋濱野家の数代前のご先祖で、各種事業を手がけるかたわら、国学を学び、医学を学んで種痘を行うなど、多方面で活躍した人です。

この本は、出版されることなく、関心のある人が手書きで写したものが、広く利用されて来ました。濱野家の原本は、津波被害などで一部を除いて失われ、他に満足な写本は見えていません。鳴戸吉兵衛が写して鳴戸家に伝えられている写本(関係者は鳴戸本などと呼んでいます)は、最も信頼のおける伊東誌の写本で、伊東にとってかけがえのない宝です。

(編集委員 加藤清志)

中世史部会の活動

編集委員 山田邦明

(東京大学史料編纂所教授)

中世史料のひろがり

鎌倉幕府の成立した十二世紀末から、小田原北条氏が滅亡する十六世紀の末まで、およそ四百年間を一般に「中世」とよびます。今回の市史編纂では、まずは関係史料を集めてその成果を「史料編」の形で刊行し、そのあと「通史編」で歴史叙述を行なうことになっていきますので、中世部会においても、まずは伊東や伊東氏にかかわる史料を捜す作業に着手しています。ただ伊東氏が歴史上姿をみせる十二世紀は「古代」と「中世」の境目にあたり、「古代」と「中世」を分けて考えるのは実態に合わないので、実際には中世部会と古代部会は合同で作業を進めています。

中世にかかわる「史料」にはさまざまな形のものがあありますが、やはり紙に墨で書かれた「文献史料」が最もポピュラーです。この「文献史料」には証文や書状などの「文書」と、日記などの「記録」があります。

召し抱えられることになります。伊東とのかかわりをもち続けたのはこちらの一流ですが、一般的には日向の伊東のほうが有名です。

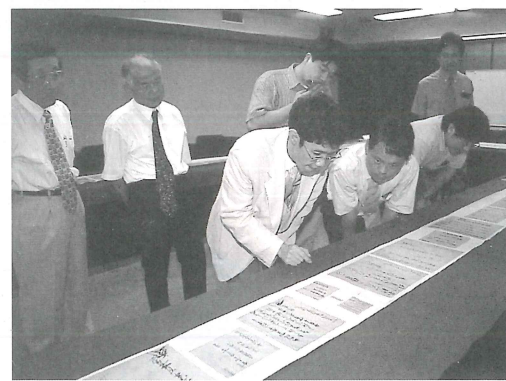
このように一口に「伊東氏」といっても、伊豆の伊東にいた伊東氏、日向に移って発展した伊東氏、陸奥安積の伊東氏、その他あちらこちらの伊東氏というように、かなりの広がりを見せています。こうしたさまざまな伊東氏の史料を広く集めることが必要になります。

また宇佐美を本拠とした宇佐美氏もそれなりの活動を示していて、越後上杉氏に仕えた宇佐美氏など、各地にその流れがいるようなので、こうした史料をみつけることも重要な課題となります。

史料収集作業の実際

伊東市域と伊東氏・宇佐美氏というふうに対象を限定しても、かなりの文献を探る必要があります。まず思いつのが『吾妻鏡』をはじめとする鎌倉時代の史料です。伊東氏は中世を通じて存続しますが、やはり伊東祐親の活躍などが一般的には目立っていますし、まずは鎌倉時代の史料をくまなく調

す。和紙に墨という素材は保存性が格段にいいので、日本には多くの「文書」や「記録」が残されていますが、そのうち古代や中世のもののほとんどは、何らかの形で翻刻されています。ですから伊東や伊東氏にかかわるさまざまな記述を、出版された本をめくりながら捜すというのが、史料収集の主たる形になります。



東京大学史料編纂所に所蔵された伊東家文書の調査状況

また江戸時代や明治以後に作られた書物の中に、中世の伊東や伊東氏のことを書かれている、というケースもあります。こうした記事も中世の実態をそれなりに反

べなければなりません。鎌倉時代の関係者が編纂した『吾妻鏡』は基本文献なので、関係記事をチェックする作業をまず行ない、これは終了しました。それから鎌倉時代の文書を網羅的に集めた『鎌倉遺文』や、歴史的な事件を年月日順にまとめ、関係史料を配列した『大日本史料』(鎌倉時代の分は第四編と第五編)をめくって史料を捜すことが必要です。『大日本史料』は鎌倉時代の後期については未刊ですが、鎌倉時代の史料はそのほとんどがまとまった史料集に収められているので、こうした作業によって漏れのないデータが揃うと考えられます。



関係する刊本と周辺市町村の史・誌

映していると考えられるので、調査の対象に加えることにしています。

中世の伊東と伊東氏

中世に関わる文献史料は膨大ですが、この中からどのような史料や記事を拾うかが問題になります。このことを考えるために、伊東と伊東氏について簡単な説明をしてみたいと思います。

現在の伊東の中心地域はかつて「伊東七郷」とよばれていました。ただ「伊東」の範囲はこれだけでなく、川奈あたりも含む広い範囲が「伊東庄」という荘園に含まれていました。それから伊東の北の宇佐美や南の富戸も古くからある郷でした。伊東市域は大きく分けて伊東と宇佐美・富戸からなりたっていますから、伊東だけでなく宇佐美・富戸の史料も探さなければなりません。

つぎに伊東氏についてですが、頼朝と争って捕えられ自殺した伊東祐親が有名で、伊東氏はその子孫だと思われがちですが、実はそうではなく、伊東祐親の従兄弟でライバルだった工藤祐経の子孫が

伊東氏の本流です。祐経は曾我兄弟(祐親の孫)に討たれますが、子の祐時が伊東を称し、その子孫が続いていったのです。

この伊東祐時という人物が伊東氏の繁栄の基礎を築きました。彼には多くの子がいいましたが、子供たちは新たに獲得した遠方の所領に派遣され、それぞれ新しい家を興していきました。日向(宮崎県)・石見(島根県)・播磨(兵庫県)などにさまざまな伊東氏が生まれました。また祐時の弟の祐長は陸奥安積(福島県)に移り、安積伊東氏の祖となりました。鎌倉時代に伊東一族は日本各地に散らばり、子孫を広げていったのです。

伊東の地はもちろん伊東氏の本拠で、祐時の六男の祐光が継ぎ、その子孫に継承されていきますが、この伊東本流は、南北朝時代に大きく二つに分裂します。このうちの一流は日向に完全に移り、江戸時代には大名になりました。そしてもう一流の伊東氏が駿河安部山を中心に活動を続け、伊東も保持しながら、やがて小田原北条氏の家臣となり、さらには江戸幕府に

南北朝時代以後の史料についてはこうした状況ではないので、検索の対象となる書物は多様ですが、その中心になるのは県史・市史などの自治体史です。特に最近の自治体史では関係史料を「史料編」の形で集成している場合が多く、それらが史料搜索のなによりの手がかりになります。伊豆の伊東氏に關していえば、『静岡県史料』『静岡県史』『神奈川県史』『埼玉県史』などの県史類と、『戦国遺文』後北条氏編などが思いつきます。『静岡県史料』は戦前に刊行されたものですが、きわめて水準の高い史料集で、その価値は現在でも失われていません。これは『静岡県史』編纂の一環としてつくられたものですが、最近県史編纂がふたたびなされ、あらたな形の『静岡県史』が刊行されました。『静岡県史料』は史料を所蔵者別に配列していますが、『静岡県史』では史料を編年で収録しており、ともに価値のあるものです。基本的な史料はこの二つを見れば出ているという、きわめて恵まれた環境にあります。

日向の伊東氏については『宮崎県史』と『南北朝遺文』(九州編・中国四国編、安積伊東氏について『福島県史』『郡山市史』などが基本文献で、宇佐美氏のことは『新潟県史』や『茨城県史料』に出ています。自治体史を中心とする搜索によつて、主要な史料は把握できると思われますが、残された課題は江戸時代以後に編纂されたさまざまな書物からの搜索です。堀保己一が企画した『群書類従』には膨大な書物が収められています。が、系図などの中に關連するものがかなりあるようです。また日向の伊東家(飫肥藩)で編纂した『日向記』などの文献もきちんと調査しなければなりません。

鎌倉時代に関係する史料調査と自治体史などの搜索作業はかなりの程度進んでいるので、基礎的な史料は把握できていますが、より広範囲の文献を読んで関係記事を捜すことがやはり必要です。また伊東に流罪となった日蓮にかかわる史料を捜したり、寺院の縁起などを調査したりということも取り組みを始めなければなりません。

近代現代史部会の活動

編集委員 鈴木祥二

(名古屋大学教授)

伊東という地域の特徴はどのようなものでしょうか。思いつくままに特徴らしきことを、部外者の立場からあげるとすれば、温泉と観光の町、災害に敏感な町、漁業に支えられた町、別荘の町、陸上交通より海上交通が便利であった町といったところだろうか。それは伊東に住む市民と私のようなまったく住んだことがない人間では、日々の生活感覚からして違うわけですから、特徴のとらえ方も異なります。また歴史を考えていくために欠かせない、年中行事の体験もありません。私たち近代史の編さんに携わるものが選択し、整理し、叙述した伊東市の歴史が、実感的に間違っていますと批判されることも十分にありうるのではないかと思います。



赤沢区有文書の調査状況

そこには選択する人間の考え方が反映して、いくつもの可能性があります。しかし、何を、どのように選択するかを判断させるの

は、その町のもつ特徴をどのように考えるのかということでもあります。

市史の史料の調査は、今のところ全く不十分ですが、その一端を市内と市外に分けて紹介します。

市内では、これまでの事前の調査の情報と蓄積もありますし、加藤清志氏による伊東の近現代史の詳細な著書を調査のよりどころとして利用できます。また、私たちが伊東の近代史を理解する格好の史料として、『新年会誌』という旧伊東町の、いわば行政案内パンフレットがあります。明治四四年から刊行されたものですが、新年に際して前年の回顧・年中行事・諸統計などが記録されており、これらによって簡単な年表や統計的な変化を知ることができます。私は他の地域でこうした行政記録を見たことがなく、なぜこれが刊行されてきたのかを含めて検討していくことはたいへん興味深いことだと考えているところです。

わたしたち編さんを担当する者にとつて、たいへん心強いのは市史編さん室にすでに収集されてい

る古文書があることです。市史編さん室には現在の伊東市域にあった旧行政村の村役場文書が保管されており、伊東の近代史料の大きな特徴となっています。それは旧小室村・旧対島村文書が主なものです。すでに隔年ごと、また分野ごとに表紙が付けられ、各文書が綴られた状態で整理されています。旧町村文書は市役所の保存文書庫にもあり、編年別に整理されており、また簿冊目録もあります。ただ残念なのは、旧伊東町や旧宇佐美村の村役場の文書が失われていることです。

しかし、市内の各地区に伝来・所蔵されている区有文書には、旧役場文書をそのなかに含んでおり、もう一つの近代史料群の柱となっています。区有文書はその残存状態によって、市史の性格も特徴も異なってきます。それらは各地域の歴史的・民俗的な特徴を理解するために、最良の材料を提供してくれます。伊東地域の歴史を書く際には、市内の各地区をバランスよく取り上げ、配慮していくのに欠かせない史料となります。市



十足消防団詰所内に残る史料群

写真撮影をさせていただいています。これからも、各地区の区有文

書の調査を続けたいと考えています。

漁業が伊東市の社会と生活を支えてきたことはいうまでもないことです。伊東市漁協の倉庫には段ボール詰めのまま山積みとなった漁協関係の簿書類や伝票類を見つけ(五〇〇六〇箱分)、編纂室で薰蒸を行い、調査を始めてきました。すでに伊東市漁協には一部整理され、目録となった主要な近代漁業史料(段ボール二二箱分)があり、漁場絵図や漁業区などの貴重な資料を使うことが出来るようになっていきます。旧宇佐美漁協などにも史料が残されているというところでもあり、他の支所に残る漁業関係資料の発掘と整理、目録化は課題となっています。

漁協以外にも、伊東市内の観光業・旅館業・温泉業・不動産業など各種の団体の史料を丹念に見つけていくことが欠かせません。また、小学校は各地区の歴史ともっとも密接な関係があり、学校日誌などの確認と内容の検討が地域から市や国の歴史を見るための史料となります。さらに、市内の家文

書は住民生活をいろいろな面から再構成していくための史料であり、ぜひともこうした史料の所在に関わる情報をお寄せいただきたいし、調査にご協力をお願いしたいと思います。

市外の調査について、最初に東京における政府公文書について調査しています。国との関係で近現代のどのような事柄が問題となり、またどのような事件が起きているのか、見通しを得るために、国立公文書館の政府公文書の確認はまず欠かせないところです。最初に注目したのは、観光都市の伊東の形成に関する史料の残存状況でありました。温泉掘削・旅館営業、さらに別荘地開発などに関する法令とその制定過程、国立公園の設置などが、伊東の近現代史にとって重要な問題となります。一九三一年三月国立公園法が制定され、伊豆箱根も指定を受けることになりましたが、東京にある国立公文書館の旧環境庁移管文書には、国立公園に関する大量の史料があり、伊東・伊豆半島に関してホテル建設や温泉開発などに関する許認

可関係書類を多く見つけることができましたし、他にも地域経済や観光にとつて切実な課題でもあった鉄道敷設に関わる鉄道文書が残されているのを確認できました。

こうした政府公文書と市役所蔵の公文書、さらには市内の旅館・温泉組合、また銀行などの史料を組み合わせて、明治中期以降の伊東の近代的な骨格の形成は追うことができるでしょう。また、これは未調査ですが、東海汽船・東海自動車などの交通業関係の会社文書の調査も現在の課題です。

伊東市はいくつかの地区が合併してできた人工的な行政区画です。上述したように、区有文書が各地区のたどってきた特色ある歴史を知るための基本となる史料です。これ以外にもそれぞれの地区の郷土にたいする感覚をぜひ知り、それを市史のなかに反映したいと考えています。文字に書かれた資料はもちろんであります。郷土の歴史を知るための石造物や記念碑、伝承などについても、近代史の立場から利用できるものは多いと思っています。それぞれ

の地区の近代の伝承も少しずつ集めることができれば、それが市史



戦後の新年誌

の近現代編を豊かにしてくれるでしょう。災害や戦争、事件の言い伝え、大きな出来事にたいする反響など、文字史料や新聞には見られないものがそこにはあります。そうしたものをぜひ市民の生活史を再現する材料として利用したいと考えているところです。

市史の近現代史料編に載せることができるのは、ほんのわずかな史料でしかありませんし、通史的記述においても取り上げることができる事柄はすべてでないことは言うまでもありません。何を選び、何を選ばないか。どのような事柄に配慮し、何を強調するのか。歴

史の流れのどこを出発点として、またどこで区切りを作るか。そうしたことを議論し、考えていくなかで、伊東という町の歴史の特徴を描くことができるのではないかと思います。私たち近現代の委員は、それぞれの専攻の分野では数多い史料を見えていますし、それなりの勘も働きますが、私たちはたいへん狭い分野の歴史しか知りません。しかし、お互いに努力しながら、よりよい伊東の歴史を考えていきたいと考えています。市民の皆さんからいろいろ教えていただければと思います。

市史編さん室から

市史編さん事業報告
毎年好評の市史講座・市史講演会

市史編さん事業では、伊東市の歴史を市民のみなさんに体感していただく機会として市史講座と講演会を毎年実施しています。

平成十四年度には、歴史上の大事件として知られる元禄大地震の伊東での津波被害を復元しながら市内を歩きました。当日は、七十人も参加者を得て津波研究の第

一人者として知られる今村文彦（東北大学教授・市史専門委員）

先生の調査成果をお聞きしました。また、平成十四年十二月七日ひぐらし会館ホールにて市史講演会を開催しました。前立正大学学長で伊東市史副編集委員長でもある坂詰秀一先生に「考古学からみた伊東の歴史」をテーマに御講演いただきました。市内に百数十か所ある遺跡を時代別に通観し、実物資料から伊東の歴史にどう迫るかをお話しいただきました。



「津波」をテーマに市史講座を実施

平成十五年度には上原仏教美術館（下田市・館長寺井行雄氏）の協力を得て市内の仏像調査を本格化させます。寺院・お堂の管理者の

皆様のご協力をお願いします。



八幡野大江院の仏像調査のようす

好評配布中 刊行図書二冊

『伊東温泉のうつりかわり』

『伊東の今・昔―伊東市史研究第二号―』

伊東市史叢書第三集は『伊東温泉のうつりかわり』を各種の基本資料で通観できる内容としました。市史研究第二号『伊東の今・昔』には、東京大学史料編纂所教授山田邦明先生による講演録「伊東氏の五百年」などが収録されています。両書は、市内書店や教育委員会の窓口で実費配布しています。

編集発行 伊東市教育委員会

生涯学習課 市史編さん係

〒414-8555 伊東市大原二丁目一番一号

TEL 〇五五七―三六―〇二一 内線二八四五